永遠の魔術師

天海梨楚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ２６５６Ｓ

【作者名】
天海梨楚

【あらすじ】
「知ってるか？　西の森に住む金緑の魔術師の話。彼が国で最強の魔術師じゃないかって噂だぞ」「いやいや、俺は四方位に入る実力者だって聞いたぞ」クレイティス魔術学園で囁かれている噂。それは西の森の外れに住む魔術師についての噂だった。※ちまちま進みます。恋愛要素はそこまで高くないと…。しばらくはＦＴ要素強め。ノリと勢いで書ききる長編、一応１～２年での完結を予定しております。

01　ロセウスの魔術師

魔術とは、魔力を変化させる術のことである。

術式によって魔力を思い通りの形に設計し、ありとあらゆるものに作り変えることができるという。

――まさに神のごとき所業。それは有形無形を問わない。

魔術師としての資質とほんの少しの才能、それとひらめきさえあればいいのだ。もちろん、努力が必要なのは言うまでもないこと。

だが魔術は所詮一時的なものでしかなく、いずれは消え去るまやかしのようなものでしかない。どんな魔術も時が経てばもとの魔力に戻ってしまう。

ならば、魔術は極めて流動的な現象だとも言えよう。

そして永遠を宿す魔術など存在しないはずだろう。

完全不変の魔術

もし、そんなものが本当にあったとしたら。

あるいは、それが本当に存在しないものだとわかっていれば。

あんな夢を見なければあの人は……

――死なずに済んだのかもしれない

★☆★☆★

このロセウス王国では、古くから政策として魔術師の育成に力を入れている。王立クレイティス魔術学園がその象徴である。北部のアトラ地方でもやや王都寄りの広大な面積を占める学園は、領地クレイティスをまるまる一つ改造して建てられたものであるらしい。

また、魔術師の存在が広く公に認知され国政として魔術師の育成を始めるまで、魔術師は偏見に晒されてきたと伝えられている。しかし、現在では王宮に勤める魔術師も多くいるし、そういったものは減ってきている。もはや、ほとんど無くなっているはずだ。

身分の高い貴族の家ともなれば専属の魔術師を雇うことも珍しいことではない。優秀な魔術師をたくさん雇うことが貴族間でのある種のステータスシンボルとなっている。

ロセウス王国は近隣小国の合併によって建国されたゆえに、他国からの侵略という脅威がない。つまり今、この大陸にはロセウス王国しか存在していないことになる。

だからといって魔術師の需要が少なくなってきたというわけでもない。かつて戦場において力を振るってきた魔術師たちは今、探検において重要視されてきているのだ。

この大陸にはまだまだ未開の土地が多く残されている。

国内の西部に位置するプルルスの森の奥、アーテル山脈を越えたその先の地を便宜上アルブスと呼んでいる。便宜上というのは、未だに山脈を越えアルブスを見たという者が現れていないからである。

また、国内北部アトラ地方をずっと北上した先にある凍土をカエルレウムと呼んでいる。

常時大地は雪に覆われている。吹雪に恵まれ視界の悪い、閉ざさ

れた土地だ。極寒の地の全貌はいまだ謎に包まれままである。
南のルーフス砂漠も似たようなものだ。
延々と続く砂の海には果てがない。下手に砂漠を渡ろうものなら迷った挙げ句、骨と皮の干物になって見つかるとか。発見されるのは稀なことで、殆どは砂漠の一部となってひっそりと消えるのだそうだ。

どこも到底、人が住めるような土地とは思えないほどに過酷で険しい。しかし、人々はそこに――まだ見ぬ地に多くのものを求める。

過酷な道行きのなかで治療を施し、水を探して、活路を開いて先を示す。
そうやって魔術師たちは魔術で支え、幾つもの旅を導いてきた。

未開の土地の探索において、魔術師は重要な役割を担っているのだった。

01　ロセウスの魔術師（後書き）

【ステータスシンボル】

意味は、〔社会的な地位の高さを象徴する所有物や習慣〕とあります。

つまり一般的にステータスと呼ばれているもののことです。

辞書を引いてみたところ、ステータスには〔身分、社会的な地位、階級〕とありました。

ステータスでも意味は通ると思いますが、せっかく気付いたので載せてみました。

02　金緑の魔術師

実り豊かなこの季節。まだ外は少し肌寒い。野菜は収穫期を迎え人々は忙しなく、けれども楽しそうに作業に専念している。

次の季節を迎えれば寒さはよりいっそう厳しくなるだろう。寒くなるずっと前から準備を怠ってはいけない。この時期の頑張りが、次の芽吹きの季節をよりいっそう豊かなものにしてくれるだろう。

そんなパラマ地方の片田舎の風景にそぐわない建物、金緑館という屋敷。今回の目的地でもある。

茶色で施された装飾のおかげで黄色の外観でも奇抜な印象にならない。屋敷の主人の趣味は良いらしい。その屋敷は、周りの村々の建物に比べるとかなり広い造りのようだ。

国でもっとも広大な森、プルルスを背にして立つ屋敷の前には庭が広がっている。しかし、珍しいことに一般的な鑑賞用植物がまったく植えられていない。代わりに薬草と思しき草植物や野菜ばかりが豊富に植えられている。時期になれば庭は豊かな野菜の花で埋め尽くされることだろう。

一般的な富裕層の屋敷では有り得ないような変わった庭だが、合理的で実用性を兼ね備えた良い庭だと思う。

そんなことを考えていたのはやや年若く、青年と呼べる年頃の男。名前はドルガ。アルステア伯爵家に仕える魔術師のひとりだ。ドルガは学園を卒業して数年しか経っていないが二十代前半だ。

そのドルガは今、雇用主のハイン・アルステア伯爵の密命を受け、金緑館へ向かう事になっている。

金緑館には、ある魔術師が住んでいる。その名の通り《金緑》の異名をとる魔術師だ。

彼に関しては、何百年も生きている、どこぞの高貴な生まれだ、などさまざまな憶測が流れている謎の多い人物だ。

彼の住むという館には、何人もの魔術師が噂の真相を暴こうと向かっていったらしいが、誰一人屋敷に入ることが出来なかったというから不思議なものである。

目の前に館はあるのに敷地には入れない。

彼自身の魔術による妨害というのが定説になった。

噂になるのだから実際に屋敷に入れた者達がいるはずだが、彼らは多くを語らない。そして話したとしても、各々食い違っていることもしばしばで結局何が真実なのかわからないままだ。

しかし定説に従えば、誰も彼の魔術を破れなかったということになる。学園の四方位に近いと目される魔術師でも失敗に終わったらしい。やはり彼は四方位に入る実力者なのではないだろうか。

彼自身が実際に四方位選定大会に出場すればわかりやすいのに。

四方位の魔術師とは、東西南北を冠する四人の魔術師たちのことで、国で最高位の魔術師として扱われる。毎年学園が主催する大会で決められているのだが、参加資格は学園の魔術師であること。それだけだ。

政策として学園を運営する以上、目に見える成果を出さなければならない。民に広く知ってもらうという側面もあって、大会の様子は一般公開されている。

生涯で一度でも四方位になれれば、他の魔術師から一目置かれる存在となる。次の大会までは国から一定の制約も付くが、その間は子爵位相当以上の厚遇が国から約束されている。また、期間が過ぎてもそのまま雇用継続もあり得る。要は個人の働き次第だ。他の貴族からも引く手あまたで仕事には困らない。多くの魔術師は、仕事や名誉を求め、大会で高成績を残すことに力を注いでいる。

王都の屋敷を発って五日、ドルガは馬車を乗り継ぐ旅でここまで来た。

なれない長距離の馬車移動は、彼の腰を容赦なく痛めつける。

転移魔術は存在するが、転移距離に比例して必要魔力量が増えていくという便利だか不便だかよくわからない代物だ。体内魔力量の少ないドルガでは遠くへ行けない。たとえ自然に漂う魔力に頼り必要量を確保したとしても、扱いきれず失敗に終わるだろう。必然的に長距離の移動は馬車になってしまう。

西の端プルルスの森の近くにあるだけあって、思っていたよりもずっと遠かった。

魔術師としてのドルガは自分のことをそれなりに優秀な方だと思っている。なんといっても学園の最終課程、高等部まで進学し卒業したのだ。今回の内密の訪問という大役を受けたのもそういった信頼があるからだと思っている。

しかし長年の学園生活に、王都の屋敷から離れることも少なかったため、長旅は本当に辛かった。

それでも、あの噂の魔術師に会えるかもしれないという期待が胸

の内にあったため、多少の苦労などは気にもならなかったのだが。

件の屋敷に到着すると、敷地内入ることに成功した。高まる気持ちを落ち着かせ、屋敷の戸を叩き訪問の意を示す。するとすぐに年配の使用人が扉を開けた。

黒い簡素であるが仕立ての良さそうな服を着て眼鏡をかけた出で立ちは、この片田舎には不似合いに見えた。

眼鏡とは視力矯正器具のことで、これも学園で開発された物だ。眼鏡に用いる薄いガラスは魔術で製造されるので、貴重で値が張る。手作業でここまで薄いガラスを造ることなど考えられない。まだ貴族など富裕層にしか出回っていないはずなのに一介の使用人が持つとは。使用人には主の人柄が表れていると言うが……。

めずらしい眼鏡に驚き不躾にもじろじろと見てしまったが、その使用人はさして気を悪くしたようでもなかった。

「どういったご用件でしょうか」

「金緑の導きを求めて」

そう言うと、使用人は私を屋敷へ招き入れた。動作も洗練されていて美しい。

これは金緑の魔術師に依頼を申し込む際の合言葉のようなものだ。要は『助けが欲しい』という意味で、少しわざとらしい言い回し。一部の魔術師の間では有名である。ちなみに私の持つ知識のほとんどは学園時代に仕入れてきたものだ。

しかし、こうもあっさりと屋敷に入れるとは思っていなかった。噂はこうも当てにならないものなのか。いや、まだ気を抜いてはいけない。合言葉を言ったからといって、なんでも依頼を引き受けてくれるなんてそう都合の良い話があるわけがない。ここから先の交渉が重要になってくるだろう。

優秀な魔術師を数多く輩出してきた学園で高評価を受ける話題の魔術師。一体どのような人だろうか。

★☆★

屋敷の内装には、緑や茶色といった落ち着いた色合いが用いられていた。赤や金を差し色にしているため、見るものには地味な印象を与えない。外壁といい、内装といい、この屋敷は本当に素晴らしい。というのも近年、王都では貴族趣味と呼ばれている派手な装飾が流行している。

私自身も都に勤める身であるため、否が応でも目にしなければならない。しかし、流行という理由であっても、あの悪趣味を受け入れることは到底出来ない。とにかく過剰すぎるのだ、装飾が。窮屈に感じるぐらいに自己主張が激しい。存在感が強すぎて近くにあると落ち着かない。美しいとは思うけれど、感性に左右される偏った美しさ。

公共の施設では取り入れられてはいないが、仕事の都合上いろいろな屋敷に出向かなければならない。アルステア伯爵も同じ意見だと知ったときは本当に良かった。勤め先での安全は確保されたのだから。この金緑館も貴族趣味ではなくて安心した。

そもそも、この片田舎で都の流行を反映しているというのも、おかしな話なのだが。

通された部屋は一般的な応接室のようである。
長椅子に腰掛けていると、部屋の奥の扉から青年が姿を現した。
純粋な黒い髪は肩口まで伸ばされ、サラサラと揺れている。なかなか整った顔立ちにある切れ長の瞳は濃い緑色で印象的だった。長身の体躯はがっしりとしているわけではないのに、ひょろりとした印象も与えていない。歩き方や所作の端々からも、充分な教育は受けているように思われる。

おもむろに私は椅子から立ち上がった。
「あなたが金緑の魔術師ですね。私はドルガ・クロエチレと申します。この度は突然の訪問にも関わらず、お会いしてくださったことに感謝しています」
「……」
彼は何も言わなかった。何も喋らない。
仕方ないから、こちらから用件を切り出すことにしよう。
彼が向かいの長椅子に腰掛けたのを見計らい、長椅子に座り直した。
「早速ですが……」
鞄から布張りの箱を取り出して、彼に中身を見せるようにテーブル置いた。箱の中には、中央の大きな赤い薔薇細工が目を引く美しい首飾りが収められている。

だが、青年はその首飾りを見るなり眉を顰めてしまった。そして不快な表情を隠しもせずに箱に向かって手を伸ばす。
訝しみつつ彼の動作を目で追っていると、バチッという何かが弾ける音に驚き、咄嗟に目を閉じた。

床に物が落ちる音
木の割れる音
カラカラと床を何かが滑る乾いた音

それから静寂が戻ってきた。

非常に嫌な予感がする。
恐る恐る目を開いた。目を開いた先に箱はなかった。顔をあげると、一瞬彼の濃い緑の瞳と交わる。なんて美しい緑だろう。けれど、男同士で見つめ合うという気恥ずかしさから、すぐに視線を逸らして周囲に目を向けた。

視界から消えてしまった箱はすぐに見つかった。
壁際にあった。ルビーやペリドット、真珠などの高価な飾りを散らし、木屑と金具を振りまいて。
完全に砕けてしまっているようで、もはや外箱は形すら留めていない。首飾りは金具が折れ曲がったり折れていたりと使い物にはならないだろう。本当にただの木片と飾り。ここまで木っ端微塵になってしまえば魔術でも手の施しようがない。幸いなのは、宝石が割れていなかったということぐらいだろうか。

（いったい何が起こったんだ？　）

魔術の使用痕跡はなかった。けれど自然と青年のほうに目がいってしまう。

単に箱が寿命を迎えたのか？　――それはない。であれば考えられるのはこの人が意図的に破壊したか、不幸な事故が起きたのか……。

とっさに考えたことが箱の心配ではなく、破壊の経緯だった。

ふたりの間に、微妙な空気が流れる。だが、それも長くは続かなかった。

その空気を切り裂くように部屋に赤い環状魔術式が展開されていったからだった。

03　当てにならない噂

「私が留守の間、なにをやらかしているのです、アレク」

どちらかが口を開くよりも先に高い声が場を制した。

続いて、見知らぬ少女が例の赤い魔術式から飛び出してきた。

彼女の服装は装飾の少ない白いドレス。その上に丈の短い同色のケープ。前合わせで胸を覆う程度、肘上までの長さしかない。

日焼けを知らないような白い肌に整った顔立ち、瞳はサファイアのような輝く青。背の半ばほどまである黒髪は、風を孕むと、光の加減でさまざまな色を纏い放射状に広がっていく。見るものを惹きつける何かを彼女は放っていた。

（敵……　ではないよな？）

目の前の青年と知り合いのようだが、私は現れた少女を警戒する。

おそらく彼女は空間転移をしてきた。

空間転移系の魔法は現在学園でも高等魔術に分類されていて、中等部や高等部での実技試験課題にも出されたこともあったはずだ。必要魔力量もかなり多く、気軽にホイホイと使えるような便利な術ではない。

彼女はそれなりの使い手とみて間違いないだろう。

「あら、初めまして。今回は魔術師がいらしているのですね」

少女は優雅に一礼をする。
自分が魔術師だと名乗ったおぼえはない。
それなのに、予め知っていたかのように挨拶をしてきた。
一般的に魔術師が正体を見抜かれたぐらいでは驚いたりはしない。
しかしドルガの場合、日頃から魔術師としての気配を抑えている。
つまり、魔術で微量な魔力を保持する一般人を装っているのだ。
魔術に少し詳しい人としての立ち位置をとっている。また、アルステア伯爵家と専属での雇用関係を結んでいる以上、魔術の行使には制限がかかる。おおっぴらに魔術師ですと公言していると、過剰な期待をする輩が現れて、それが非常に煩わしい。

しかし、易々と彼女には見破られてしまった。ということは彼女は私以上の実力者なのか。
だが、相手は自分よりも明らかに年下の……少女。

「今まで出かけていましてね。応対が遅れてしまいました」

彼女の目線はドルガからアレク、そして床に広がる首飾りの残骸に移った。

「ところで、これは何ですかね」

少女は残骸を見て首をかしげる。

「私が持参した首飾りなのですが……。私は目をつぶっていたのでなんとも。彼なら詳しくわかるのでは？」

本当に何が起きたのかわからなかったので、アレクと呼ばれた青年に話を振る。彼女は青年に一瞥を投げた。

「で、これは一体何なのです？　」

自分のときとは打って変わって、やや厳しい声音となっている。

「さあ？　箱全体から嫌な感じがしていた」
「それで？　」
「ちょっと弄ろうと」
「そうですか。アレクが壊したのですね」
「決めつけないでくれ。俺は、？しようとした？と言っただけだ」
「現に、もう壊れているではありませんか」
「俺が壊したわけじゃない。手を近づけた途端、首飾りが箱ごと勝手に壊れたんだ」
「勝手に壊れる？　何言ってるんですか。そんな非魔術的なことを。自壊機能でも備わっていたというの」

彼女は残骸へと近づいていく。

「貴女は、何を根拠に私が魔術師だと思ったのですか？　」

ドルガにはその動作をを中断させても先に聞いておきたいことがあった。
自分の隠蔽術式は易々と見破られるようには組んでいなかった。
自分では気づかない重大な欠点があるのかもしれない。
歩みを止め、振り返った彼女は言った。

「一目見れば分かりますよ、それぐらいは。それに貴方からは微量ですが魔力の残滓、魔術を使用した痕跡が残っています。数日の間に魔術を使いましたよね？」

まさにその通りである。

たしかに昨日、オルガは魔術でアルステア伯爵に経過を報告してきた。だが自身でも感知できない程まで減っていた残留魔力を他人が感じ取るとは。

「ですが、こんなに無駄を少なくして魔術を行使する人はなかなかいませんよね。大抵の人はもっと効率が悪いですから。そこまで心配する必要はありませんよ」

通常、魔術を行使すると、無駄と呼ばれるように変換しきれなかった魔力が空気中に漂う。体内の魔力を体外にある魔術式という枠に流す作業の都合上、術式から溢れてしまう魔力が発生する。けれど一度体外へ出てしまった魔力を体内に戻すことは出来ない。体外に出た魔力は変質してしまうと云われている。たとえそれらを再び体内に戻しても、体にとって毒になるそうだ。

例えば、水差しからグラスへ水を注ぐとしよう。

上手な人なら必要な量だけグラスに水を注ぐことができる。しかし、グラスの大きさを見誤ったり、注ぐ量を間違えればたちまちグラスからは水が溢れてしまう。水差しの形が悪ければ水をうまく注げないかもしれない。また、一度こぼれた水は汚れてしまう。こぼれる前の水とは同一ではないから再び水差しの中に戻すわけにもいかない。ここらへんが無駄につながる。どちらも練習で上達する事なので、術者自身の努力の問題か。

「それに魔力感知も、訓練次第では伸ばすことは可能です。もちろんあなたでも」

にっこりと笑いながら断言した。

どうやら自分は高く買われているとみていいようだ。しかし、魔力感知能力を上げるなんて。

魔力感知能力は魔術行使における基礎能力の一つだが、その力は大抵生まれつき決定されている。

聴力や視力などと同じ先天的なもの。補助器具を使えば伸びるかもしれないが、自力で伸ばしたという例は聞いたことがない。

「それならば是非お願いしたいところですね。ところで、あなたはこの屋敷の主人とお見受けしましたが？」

先ほどまでの会話から、彼女は彼よりも上に位置する者としての態度を取っていることが窺える。

「ご挨拶もまだでしたか？

初めまして。私はアトリルと申します」

「私はアルステア伯爵家付き魔術師ドルガ・クロエチレと申します。……失礼ですが、そちらの彼が金緑の魔術師では無いのですか？」

やや間を置いて、アトリルが口を開いた。

「……貴方も、金緑の魔術師は男だと聞いてきたのですか？」

「ええ、そうですけど」

「……やはり、ここは一度噂の訂正をしたほうがいいですよね」

「俺はこのままでいいと思う」
「間違われるのは貴方ですよ」
「別に構わないさ、それぐらい。リルだって別に男だろうと問題ないんだろう？　」
「問題大有りです！」

二人は小声で話しているつもりようだが、目の前にいるドルガには話が筒抜け。

「ええと、貴女が金緑の魔術師なのですか？」

「ええ、そうでしょう？　私がこの館の主ですからね」

少女はドルガの言葉に頷いた。

彼女が金緑の魔術師
金緑の魔術師が彼女
少女の方が金緑の魔術師

学園の噂では男だと聞いていた。はっきりと『彼』だと聞いた。
しかし、彼女の様子は嘘をついているように見えない。

（男だと言った奴は誰だ！）

間違った噂を流した張本人がいたら懲らしめてやりたい。
そうなった原因は目の前にいるアレクが作ってしまったのだが、
それはまた別のお話。

ところで、アレクと呼ばれていた青年。
彼は今、彼女の側に控えている。だが、彼と彼女との間に明確な主従関係が結ばれているようには見えない。
そして、彼が出す雰囲気はアトリルと似たもののようにも思える。細かいところは当然違うけれど、根本的な何かが。アトリルとアレクを見比べるドルガに、彼女はすぐに気付いたようだ。

「彼は家族のアレクです。彼も一応、魔術師ですよ。並みの魔術師では相手になりませんが、あなたならどうでしょう？」

アトリルは笑みを深めて問いかけてきた。

「さあ、どうでしょうかね」

ドルガも若干引きつってしまったが、笑顔ではったりをかます。正直なところ、彼と戦っても勝てる見込みはないと思う。なんとなく、そんな気がした。けれど、わざわざ自分からそれを言う必要はない。彼女はその対応に満足したようだ。

彼女は首飾りの残骸にしゃがみ込むと薔薇の細工を拾って眺める。はっとしたように真珠を一粒摘み上げ、まじまじと見つめると顔色を変えた。そして慌てた様子で、他の散らばった真珠や宝石をかき集める。

「いったいどうかしましたか？　破片が指に刺さって危ないですよ」

素手で作業をしようとする彼女を注意すると、初めて気づいたとでも言わんばかりの様子で手袋をつけ、残骸を集め続ける。あらかた集め終えると、そのまま空いているほうの手で空中に円を描いた。

「【戻れ】」

アトリルがたった一言声を発しただけで、破片や宝石といったものがふわふわと集まりだして球体を形作る。やがてその球体は膨張と収縮を繰り返しながら、徐々に元の姿を取り戻していった。

術発動の直前、ほんの一瞬だが感じ取れた濃い魔力。しかし、魔術発動後も部屋の魔力量はまったく変わっていない。つまり、無駄が少ないと。まったく魔力を浪費していない。

それだけ魔術師としての技量が高いのか。

あるいは、もともとこの術に必要な魔力量が低かっただけなのか。

残念ながら後者はありえない。先ほど感じた魔力はけして少なくなかった。動作としては、ただ魔術で首飾りを直しているだけ。端から見れば地味な作業だったが、これではっきりとわかった。

『彼女を敵に回してはならない』と。

同じ魔術師、魔術を見ればその魔術師の実力はある程度わかる。だからこそ、彼女に対し畏怖の念が湧いた。と同時に浮上する疑惑がひとつ。

（本当に彼女は見た目通りの少女だろうか？）

彼女の年齢が急に疑わしくなってきた。私も魔術師として必要な知識、技術、経験を会得する難しさはわかっている。ましてや四方位入りを目指すなら尚更。

私も学園時代から周囲では成績優秀で通ってきてはいるが、努力

をしてきたからだ。だが、実力は四方位に遠く及ばない。彼らのように魔術を使いこなすなんてできない。

そんな彼らと彼女が肩を並べるのだろうか？

事実、その若さで最高位に登り詰めるならば、天才とは彼女を指すための言葉になるだろう。

修復が完了したのか、破損前と寸分違わない箱と首飾りがアトリルの手のひらの上に存在を主張していた。

「……なるほど、この配置で構成を組みましたか。ずいぶんと手の込んだややこしい造りなことで。まだまだ無駄が多いが面白い。自動集積機能も備えているぞ！　今回の依頼はなかなか期待できそうじゃないか」

宝石箱を眺めてはいろいろ呟く彼女は、こころなしか少し嬉しそうに見える。そして、口調が若干変化していた。

まるで男のような……。

「それで、今回の依頼とこの首飾り、どういう関係だ？」

「それが素ですか？」

聞かずにはいられなかった。怪訝な表情をしていたが、何のことだか気付いたらしい。

「いえ、そういうわけではありませんよ。それで？」

今度は口調がもとに戻っていた。

「あ……、ええ、少し長い話になりますよ……」

そう断りを入れて私は二人に向かって語り始めた。

０４　魔術と医術

「私の雇用主ですが、アルステア伯爵家についてはご存じですよね」

まずはそう切り出した。

「東のイスナ地方にある商業都市カバネラを含むナタラ領の領主。一族からは商人を多く輩出し、現在の物流の基礎を確立、経済面においては随一の影響力を持っている――ではなかったか？」

アレクが口を挟んだ。これらの情報は割と有名だ。

「確かイスナ地方は海が綺麗なところでしたよね。昔行ったことがあります」

（昔っていつだろう？　）

先程の年齢疑惑から自然と出た疑問だけれど、口には出せない。それはアレクが目で語りかけてくるからだ。

『無駄な詮索はするな』と。

もちろん目は笑っていないから本気だ。

「そうですね、ナタラに海はありませんが海産物も多く取り扱っているはずですよ。カバネラで揃わないものなんてありません」

ナタラの一領民として、これだけは胸を張って言える。

アルステア伯爵家。

与えられた爵位は、五等爵のうち序列として第三位の伯爵であり、高いというわけではない。だが、祖先は建国史にも名を連ねる古い家柄で地方領主としてナタラ領を治めてきた。

カバネラで取引される品物からの税収は一定額は国庫に入っているが、それでも莫大な金が伯爵家に流れてくるため、そこいらの貴族の中でも飛び抜けて裕福である。当然、伯爵家という家格に対し身分に不相応な財力を持っていると快く思わない貴族もいる。財力はときに権力にも影響を及ぼすものだ。

金に固執するのは貴族の恥、所詮は田舎貴族よと見下しているらしいのだが、そう言っているのはたいした領地を持たない貴族達だろう。他人を羨む前にまず自分の領地を豊かにしてみせろと言いたい。カバネラが商業都市として発展してきたのは、間違いなくアルステア一族の功績によるものだ。それまでカバネラは、ありふれた街のひとつでしかなかったのだから。

それに爵位の昇格の話ならある。しかし、これらの功績は一族みなで成し得たことだから本家だけが爵位を貰うのも筋違いだと、断ってきたらしい。勿体無いことだ。だがそろそろ話を受け入れるだろうとも思っている。

実際に、一族には爵位を持たず平民として暮らす者が大半を占める。確かな目利きで、頭も良い。顔を合わせる機会があったが、「金づるに身分は無し」といった割り切った考えを持つものが多く、身分にあまりこだわらない変わり者達だったと記憶している。だからこそ商売も成功するのかと感心した。

「そのアルステア伯爵家の次女カルナ様を救っていただきたいのです」

「……具体的には？」

「現在、皮膚へ症状が現れる奇病を患っています。もうじきふた月になりますね」
「うつる危険は？」
「ありません。カルナ様が病にかかってからもずっと側でお仕えしてきましたが、身体に異常はありませんでした。結界魔術を自身に向けて張ってきているので、広がる心配もないと思います。でなければこうして内密にことを運ぶことはできませんし、この場にもいられません。即刻王宮にも知れ渡ります」

道中なるべく他人との接触は避けてきたのは念の為だ。

「そうか。だが魔術師ではなく医者を呼ぶべきだろう？」

確かに彼の言う通りだろう。病なら魔術師の出る幕はない、医者の管轄だ。
怪我ならば、組織の再生や治癒を促す魔術で治療が出来る。毒を盛られれば、毒の成分を排除すればいい。しかし病は特定の薬を与えれば治るとわかっていても、症状を引き起こす原因が解っていなければ魔術でも対処できない。病の正確な原因さえ判明すれば魔術で治療出来るかもしれないともいえるが。

ただし、魔術は万能ではない。
たまに魔術は奇跡の業だという者がいるが、それは正しくない。
魔術式の構成を考え、編み出し、実際に術者がその術式を組み立てられなければ願いは叶わない。途方もない努力の上に成り立つ現象、それが魔術なのだ。

だから魔術師が病人の為に出来ることといえば、せいぜい治癒力の活性、体力の回復、医者が来るまで病の進行を抑えるということぐらいだろうか。

「最初は医者に診せました、内密に。しかし、どの医者も知らない病気だからと治すことも出来ませんでした。大事なカルナ様を実験台にするなんてことも出来ません。
全身の皮膚が青黒く変色し、皮膚が裂けやすくなり出血を起こすという症状から、皮膚の異常だと考え魔術を施したのですが、一時的に回復しても再び同じ症状が現れる。根本的な解決にはなりませんでした。まったく未知の病気です。今は常に術者が控えているので皮膚が裂けるようなこともないですが、もはや手の打ちようがありません」

自分の治療がカルナ様を苦しめる。
何度も希望と絶望を与えてしまうだけの自分の無力さを、どれだけ恨んだことか。

「それに、まだ発表はされてはいませんが、カルナ様は現時点で王太子妃の最有力候補であります。現在は、軽い病気で休んでいると公表していますが、正体不明の奇病にかかっていると他の候補者達に知られてはなりません。候補から外されるばかりでなく、まともな縁談すら結べなくなるように追い落とされるでしょう。嫁ぎ先すらないものと思わなければなりません。ですから私達はそうなる前にあなたの、金緑の魔術師の奇跡に縋るしかないのです」

アトリルを見るドルガの目は激情を湛えていた。痛み、後悔、絶望、そういった負の感情を封じ込めるかのように、固く握られた拳は赤を通り越して白くなっている。

「随分と大げさなことですね。アルステアの娘なら縁談ぐらい、背負う肩書きでいくらでもあるでしょう？　」
「私はカルナ様には幸せになっていただきたいのです。ならば、想

い合う王太子殿下と結ばれていただきたいと思うのは自然なこと。誰でもいいわけではありません」

浅ましい理由で結ばれてほしいとは思っていない。純粋にお二方の気持ちを思えばこそだ。カルナ様はもう少しで幸せになられるはずだった。それなのにこの奇病騒ぎ。絶対にこの依頼を受けてもらわなければならない。それまでは屋敷に帰ることなんて出来ない。

喉の渇きを覚え、茶を口に含んだ。

「辛い恋をしているんだな」

脈絡もなく、突然そう言い出したのはアレク。

危うく飲んでいた茶を吹き出しそうになる。

「ち……ごほっ。違いますよ。カルナ様は仕えるべきお方であって、雇用主に対しそのようなやましい気持ちは……」

「誰もカルナ嬢ともあんたとも言ってないんだが」

瞬間、顔が真っ赤に染まる。目を見開き数秒、そのままテーブルに突っ伏した。茶器はうまく避けて。

（なんて馬鹿なんだろう）

恥ずかしい。

消えてしまいたい。

「若いなあ」

にやにやとしながら、彼は実に楽しそうにお茶を飲む。

「ど……うして？」
「そんだけ必死になれるのは惚れた女だからだろう。義理や恩っていうのも考えられるが、その目を見れば……ね。目は口ほどに物を言うって言葉があるだろ」

「まったく、ふざけないでください。彼も必死の思いでここまで来ているんですよ。
……想うのは自由なことです、ドルガ殿。たとえ相手が誰であってもね。しかし、王太子に恋仲の娘なんていたんですね」
「相手はあのアルステア、王家なら喜んで迎え入れるだろうな」

政略結婚。他者からみてもそうとしか映らないのか。
愛があるのなら理想的だろう。貴族にとっては背中に背負ってくる肩書きが物をいう。王家ならなおさらだ。この機会にカバネラを直轄地に、アルステアの後ろ盾をという思惑が王家にあっても不思議ではない。この縁談は纏まるしかないのだろう。
テーブルに突っ伏したまま、起き上がれない。相手には失礼ではあるが、こんな情けない顔は見せられない。

「それで、この首飾りを見せた意味は何ですか。依頼の報酬として、持参してきたわけではないのでしょう」

ドルガの様子も構わず、アトリルは仕事の話を始めた。

……仕事の話を始める！
それはつまり、依頼を受ける気があるということ。

「私は、この病は人為的なものだと思っています。そしてこれがカルナ様の病気の原因だと思って持ってきまちた！　……いてっ」

急上昇していく気持ちのままに、がばっと上体を起こして叫んだ。
――そして勢い良く噛んだ。

「あーあ、そこで噛むのか。救いようがないな」

かけられた言葉は冷たいけれど、語尾が震えて台無し。要所で噛んだのがよほど面白かったのか、彼は笑いを堪えるのに必死なようだ。

傍に控えていた先程の眼鏡の使用人が、さり気なく冷茶を勧めてくれる。

ありがたくそれを受け取り、口の中を冷やした。

「すみませんでひた。……笑わないでください。これはカルナ様の父親が、病にかかる直前に彼女に贈ったものです。アルステアの商人が流れの商人から買いつけたものだと伺っています」

涙目のまま喋り出す。噛んだ舌が痛い。うまく発音出来ていない箇所がある。

「ふうん」

「その病が人為的だといい、これが怪しいと思う根拠は？」

「これがカルナ様の手元に届いた時期と病が現れてきた時期が一致します。そして私はこの首飾りから妙な魔力を感じ、すぐに魔術を施しました。ですが……」

「病に影響はなかったと？」

「ええ。他の魔術師達は別に原因があるのだろうと信じてはくれません」

「……でしたら、別に原因があるのでは？」

「いいえ、そんなはずはありません！　私は自分の魔術師の勘を信じています。だからこそ、この首飾りにこだわり続けているのですが……」

やっと喋り方が元に戻った語尾は小さくなってしまう。

アトリルは考え込み、アレクは呆れていた。当然だ。端からみれば、根拠もなくただ怪しいと言っているだけなのだから。

こういった物に魔術を仕込む場合、術式が残っていないなんてことはありえない。第一、何ヶ月も術を保つのは難しい。すでに術式は処分されたか、屋敷にいる誰かが定期的に術をかけているのか、または屋敷内に魔術を維持しているものがいるのかと、屋敷にいる人間を疑ってもみたけれど、犯人と思しき術者は見当たらなかったのだ。

勢いと使命感からここまできたものの、自分に自信が持てなくなってきていた。

自分は間違っているのではないか。

しかし、彼女が考え込むということはまだ何かあるのかもしれないと希望を捨てられずにいる。

「まあ、合格ですかね。それほど馬鹿ではないみたいですし。見所はあるようですね」

合格という言葉に血の気が引いた。

自分は試されていたのか。

「いいでしょう、この依頼引き受けます」

おお、引き受けて……くれる？

なんだか可笑しくて笑い出しそうになるのを堪える。
交渉の余地なんてなかったのだ、最初から。彼女のお眼鏡に適わなければそれでおしまい。きっとそうだったに違いない。もし、何か少しでも間違えていればこの依頼は引き受けて貰えなかったのかもしれない。

「ありがとうございます」

深く、頭を下げた。
人ひとりの命を助けてもらうのだ。自分に出来る最大限の感謝の気持ちを込める。

「お礼を言うのはまだ早いですよ。頭を上げてください。それに私達は多額の報酬を頂戴するんですからね、そのかわりに仕事をするだけです」
「早くなんてありません。おかしなことを言いますね。これから私は人の命を助けてもらうんですよ。感謝の意を伝えたいと思うのは当たり前のことでしょう」

何を言い出すのかと思えばそんなこと。
不思議な気持ちで見返してみれば、彼女」は虚を衝かれたような顔をしたのち、ふっと微笑んだ。

「あなたはちゃんと大切なことを学んでいるのですね」

その微笑がすごく綺麗で素敵で、顔が火照ってしまった。
激しくうろたえていると、空気塊が頭に炸裂する。

「ぐほっ」
「邪な目でリルを見るんじゃない」

声に引かれてアレクのほうを見やれば、憤慨した様子でこちらを睨んでいる。

ついさっきまで、人のことでにやにや笑っておいてこの仕打ちはあんまりだろう。

まだ痛む頭に顔を顰めるものの、口元に浮かぶ笑みを抑えることは出来なかった。

05　金の生る木

アトリルは静かに首飾りをテーブルに置いた。

「あなたの読みは間違ってはいませんでしたよ。確かにこれが原因だったのでしょうね」

彼女は、首飾りにある一粒の真珠を示した。つやつやと輝く大粒の真珠。たった一粒でもかなりの高値がつく物。

「ただの真珠ですよね」

「では真珠の構造についてはご存知ですか？」

「いえ、海で採れるとしか……すみません」

とっさに謝ってしまったのは、アレクが冷ややかな目を向けているのに気付いてしまったからだ。喉から漏れそうになる悲鳴を飲み込んだ。先ほどの不意打ちがまだ痛い。

「まあ真珠ってのは海底や砂浜にも落ちているが、本来はある貝の中から採取されるものだ。鉱石なら鉱脈が見つかりさえすればある程度の量は見込めるが、真珠にはそれがない。貝を開いてもなかなか見つからないから高値がつくんだ。いったい、一粒の真珠の為にどれだけの貝が犠牲になっているんだろうな」

急に目の前の真珠がひどく重たいものに感じられた。採ってしまったものはしょうがない。けれど、もう今までのように純粋にその輝きを愛でる気持ちにはなれなかった。

「そんな暗い顔をするなんて。珍しい事ではないはずですよ。たったひとつのもののために他が犠牲にならなければならない。世界はそうして回っていくんです。あなたも既に何度か体験しているでしょう、いろいろとね」

微笑ましげに、幼子を説き伏せるよう言われてしまった。自分よりも年下のはずの少女の言動はまるで老人のそれのようで、不自然に感じられた。

「さて、話が逸れてしまいましたね。貝殻を作る細胞と異物が貝の体内に入りこむことによって真珠は生成されるそうです。ですから貝殻と真珠の成分は同一ともいえますが、真珠は貝殻と違い必要性から作り出されたものではないのです。

その細胞が放出する分泌物はその異物を核として何重にも覆い、真珠となるのです。稀に核を持たずに出来る真珠もありますが、綺麗な球形や充分な大きさにはならないので宝飾品としてはほとんど使われていません。ちなみに殻を作る貝であれば真珠の生成が可能という話ですよ。美しさは別としてですが」

今の説明でなんとなくわかったことは、真珠は貝の体内で出来る、と。

彼女は、首飾りについている真珠の一粒を指ではじいてみせた。高い澄んだ音があたりに響き、真珠は半分に割れてしまった。

「なんてことを……」

思わず声が上擦ってしまった。　こんなに高価な物を自ら壊すだなんて。まったく信じられないことをする。

唖然とした顔で見つめ返すと、逆に驚いたような顔をされた。なぜ？　寧ろこちらが聞きたい。

彼女は使用人を呼ぶと何事かを囁く。

――さっきの眼鏡の人だ。

彼は部屋から出て行くと、すぐにワゴンを押して戻ってきた。ワゴンから平たい箱をテーブルに置くと部屋の隅で再び待機する。これはワゴンを押してくるほどの荷物では無かったような。

箱の中には様々な色や大きさの真珠が綺麗に並べられていた。真珠といってもこれだけの種類があるのか。感心して見ていると、彼女はその中から白い大粒の真珠をひとつ取り出した。首飾りの真珠と同等以上のものだ。まさか……。

頭によぎった悪い想像を打ち消して、彼女の言葉を、行動を待った。

しかし、その期待はあっさりと裏切られることになる。

あろうことか、その真珠も半分に割ってしまったのだ。これを驚かずにはいられない。そうする意図がまったくわからなかった。

「実際に見たほうが早いでしょう？　シオノに持ってこさせたのは、どこにでも売られているような一般的な真珠です。さあ、このふたつを見比べてみて何か気づくことがありますよね」

質問ではなく確認をするという間違いを許さない聞きかた。そんな違いがどこにあるというのだろう。

二人に見られる中で緊張しつつも、言われるままにじっと二粒の真珠を見つめた。

「うーん、断面ですかね。もはやそれしかないですよね。先に割った方の真珠は乳白色で美しいのですが、後に割った方の真珠は中心の素材が違うような……」

だんだんと語尾は小さくなっていく。
とりあえず、見たままのことを口に出しただけだ。
「そうですね。では、この違いが意味することは何でしょうか」
肯定ということは間違ってはいない。それを喜ぶ間もなく次の質問。違いが意味することは何だと聞かれても……何だろう。
考え込んでいると、それに堪えかねたアレクが動き出した。
「まどろっこしいな。これじゃあ、いつまで経っても本題にたどり着けないだろう」
そう言って彼は髪を掻き上げながらあっさりと話の核心を衝いてしまった。
「つまりな……この首飾りに使われてるのは真珠じゃないんだ」
シンジュジャナインダ……、
しんじゅじゃないんだ……、
真珠じゃないんだ。
――それはつまり、偽物だということ？
理解するまでにかなりの時間を要した。もしそれが本当なら、至急アルステア家と連絡を取らなければ
とにかく行動を、と立ち上がった瞬間に制止の声がかかる。
「お待ちなさい、どこに行く気です？」

「それは……アルステアに」
「アルステアに？」
「真珠の模造品が出回っているという報告を――」
「馬鹿じゃないのか？」

静かにアレクはドルガの言葉を切って捨てた。そして短く息を吐き出す。

「じゃあ、模造品の特徴は？　見分ける方法は？　知らないだろう、よく聴きもしないで。そんなことで本職の鑑定士さえ欺くような代物を、誰が偽物と信じてくれるんだ？」

嘲るような笑みを浮かべて、彼はなじる。

「そもそも、少ない情報で模造品と勝手に解釈する。虚言だとは考えないのか？　他人の言葉を鵜呑みにして」

彼の言うことは正しかった。宝石に詳しいわけでもない素人の言葉を誰が信じてくれるだろう。けれど、人の言葉を信じて何が悪いんだろう。

「おい、シオノ」

置物のように静かに控えていた使用人――シオノは、素早くワゴンの下段棚から柔らかい黒布の包みをを出した。それをテーブルに置いて、掛け布を捲る。

現れたのは鉢植えだった。
目の前には宝石のなる樹木が存在していた。
白くて丸い果実――真珠がたわわに実った小さな樹。いや、有り

得ない。まるで誰かが作った芸術品ではないのか？　縁起が良さそうであるし。

「これはなんですか？」

「それがあれだ」

彼は鉢植えと首飾りとを交互に指し示す。

「それがあれ？」

私も交互に指差した。

「白珠水晶（パールクォーツ）ですね」

「ぱーるくぉーつ？」

聞き慣れない言葉だ。

「真珠と水晶と言う意味です。ご覧のように、この樹の果実は熟すと光沢を放ってとても綺麗なんです。腐らないので保存が楽なんですよ。もちろん食べられませんが」

こんなに硬そうな実を食べようとした人がいるのか。少なくとも自分なら食べない。これは断じて食べ物の色ではない。

「しかし、生えている場所が場所なので、市場には出回りません。ひょっとしたら王家にはあるかもしれませんが、良い買い物をしましたね」

ハイン様は、いったいどこで見つけてきたのだろう。

「触ってもいいですか？」
「どうぞ」
許可が出たので、そうっと触れてみる。優しく、丁寧に。ぽきりと折れてしまうのではと思うぐらい枝は細くて硬かった。葉も薄くパリパリとして乾燥しているかのよう。白く滑らかな果実は触れずにはいられない。
どれほどの時を経て、この樹は実を結ぶのだろうか。
「その樹で屋敷が十件は建てられるな――もちろん王都の一等地に」
ぼそりとアレクが呟いた。
「そんなに！」
「水晶だからな。まあ、これを水晶と呼ぶことに関しては自分でも疑問に思っているが」
これを水晶？　水晶はガラス質で半透明の宝石のはずだ。これらにはエメラルドと翡翠ぐらい透明度に差がある。それ以前に水晶は樹から生えたりしない。
「嘘じゃない。見ろ」
彼は熟していそうな果実のひとつに自身の魔力を注いだ。その魔力に反応して、石はわずかに青く染まる。確かに水晶であるようだ。
魔術式の保存に固定、魔力の蓄積。本来流動的な力であるはずの魔力を、一時的にでも留め置くことができる奇跡の石、水晶。その利用価値は未だに計り知れない。それを生産できようものとは。

「水晶だろう。もちろん立派な魔術具になるな」

ふと手元にあるひんやりと冷たかった果実は、自分の体温が移ってぬるくなっていた。触れているところから力が抜けていくような……。

「――ッ馬鹿、いつまで触っている」

急に手を掴まれ、そのまま樹から手を引き離された。痛い痛い痛い。

はっとした様子で手を放してはくれたが、掴まれていた部分はまだ痛い。見ればうっすらと赤くなっていた。

「すまない。リルも注意しなければ駄目だろう！　こいつは魔力を糧に育つんだって最初に言っておけば良かった。俺たちは大丈夫だが、並みの術師なら魔力を取られて死ぬ……じゃなかった、魔術が使えなくなることだってあるんだからな」

どういうことだ？

魔力がなくなったら死ぬ人がいる？

初めて聞く話だった。

体内の魔力がなくなったら魔術が使えなくなるだけのはず。あたりまえのことのように言っていた。

「水晶が魔力を溜め込む性質を持つのは知っているな。魔力を込めた瞬間や素手で触れている時に微量の魔力を持っていかれるんだが、これは普通の水晶よりもずっと強い。生えている状態だとさらにな」

そんな短時間で影響が出るはずは……ない。

念のため体内を探ってみると、普段よりもずっと自身の魔力が減

っていることに気付いた。どうして気付かなかったのだろう。強いなんてものではない。もし、あのまま触れ続けていたら……。
固く両手を握りしめた。
そして俯いていた顔を上げた時、アトリルの指の間から一筋の血が流れているのが見えた。

ぽたり。

そんな音が聞こえたような気がした。
指先から滴る血液はちょうど、さっき割った白珠水晶に当たって消えてしまう。そうして水晶は仄かに赤く発光し始めた。
彼女は光を放つ白珠水晶の欠片を首飾りのあるべき位置に戻した。次第に赤い光が首飾り全体にまで広がると、あっという間に部屋を覆い尽くすほどの光が溢れ出した。
壁も床も肌も瞳もみな平等に赤く染まる世界の中にあっても、禍々しさや恐ろしさといったものを感じることはなくて、反対に自分の心が安らいでいくのを感じた。

部屋を満たす光と彼女の放つ魔術式の光が同じものだと気付いたのは、かなり時間が経ってからのことだった。
光は明滅を繰り返して、だんだんと収まっていく。そうして完全に光が消えると、すべてがもとの状態に戻ってしまっていた。
いったい何を始めようとしたのか。期待と不安を胸に首飾りをじっと見つめる。

「そろそろですかね」

アトリルの声を合図にして、例の水晶や他の飾りから次々と術式が空中に浮かび上がっていった。

ひとつ、ふたつ、みっつ……　緻密に組まれた環状魔術式が全部で十二。小さな薔薇飾りからは四つ、真珠からは八つだ。そして、中央の薔薇飾りから一際大きな環が現れると、それを中心に集まって一つの大きな環を形成していく。

――複合型魔術式か。

複数の魔術式から成る魔術式をそう呼ぶ。それは新たな魔術式の開発や魔術式の研究において欠かせない技術だ。

使えればいろいろと便利なのだが、組み立てるのが難しい。元の術式や合わせる枚数によって難易度が極端に跳ね上がるところが厄介で、ここまで複雑なものは滅多にお目にかかれない。

どこの化け物が造ったんだ？

自分も使う手法だが、せいぜい五つを合わせるので限界だ。それだって時間がかかりすぎて実戦では使い物にならない。日常的には三つから四つがせいぜい。それだって、もとの式が複雑であればそれなりの時間が必要になる。

「結局、十三でしたか。随分とまあ。ひとつひとつの完成度も高いですし、相当の時間をかけて準備してきたものでしょうね」

にたりと彼女は妖しく笑う。

目の前に広がる術式の光が彼女の顔を赤く染める。顔の造作が美しいだけに、笑みに凄みがでている。見る人に対し、ある種の恐怖を引き起こす笑みだ。さきほどまでの和やかな雰囲気と比べて場の空気は一変。笑みひとつでここまで場の雰囲気を変えてしまう。

「……これは！　ドルガ殿、カルナ嬢への異常は皮膚の変色でしたよね？」

「より正しく言うと皮膚全体の損傷です。どちらかというと、内面的なものに原因があると思われます」

「アレク、どう思います？」

アトリルは魔術式から目を逸らさずに尋ねる。その顔は真剣だ。

アレクも目の前の魔術式に集中している。

「たしかにおかしい。実際に会ってみないとわからないな」

「……そうですよね」

どこか晴れない表情の彼女は、水晶球をひとつ取り出した。無色透明なそれは手のひらに乗るくらいで、ちょうど人の眼球ぐらいの大きさだろうか。それを左手に持ち替えると、可視化した術式を手で放り込んだ。術式は水晶球の中でも赤く煌めいている。その水晶球をポケットへとしまうと茶器へと手を伸ばす。

「なにか不都合な点でも？」

「少々気にかかることがありまして……。

今見た限りでは、この術式にはそういった害を及ぼすようなものは組まれていなかったんです」

「それはつまり、振り出し戻るっていうことですよね！」

テーブルを両手で叩いた。その振動でお茶がこぼれた。それでも何度も何度もテーブル叩く。

いったい何をしていたんだ。

せっかく見つけた手掛かりだったのに。

ここまできて意味がなかっただなんて。

悔しい、悔しい。

「とにかく落ち着きなさい。一応この術の構成はわかりました。あ

とは本人に会えばまた手の打ちようがあるかもしれません」」

そんな言葉、奇跡に縋るしかない心細さを知らないから言えるんだ。

けれど、彼女はほんの少しの間見ただけ難解な術式を理解した信じられない技量を持っている。

「でしたら今すぐにでも会いましょう！　貴女ならくカルナ様を助けられるんですよね？」

「断言はしません。ですが、最善は尽くします」

アトリルはこちらへと手を伸ばしてきた。頬に布を押し当てられる。

そして自分が泣いているのを知った。

涙を流すなんていつ以来だろうか。どうして自分が今泣いているのかわからなかったけれど、ただ心の中に渦巻く強い気持ちを感じることができた。

「俺たちを信じろ。いや、信じなくていい。問題が解決出来ると決まったわけではないからな。　……だいだい、そういうのは嬉しいときにでもしろ。みっともない、野郎の涙なんて」

また、わけのわからないことを。信じろとか信じなくていいとか。普通は信じろと言うところだろう。しかし、今はその妙に正直なところが嬉しかった。なかなか涙は止まらないけれど。

彼が向ける眼差しはさきほどまでとは違って和らいでいた。それを感じ取れるほどの余裕は無かったが。

ただ、この二人は本当にすごい魔術師なのだとは分かった。自分だけ蚊帳の外にいることをはっきりと知った。会話の端々からも隔たりを感じずにはいられなかった。わずかに時間を過ごしただけで

魔術師として実力差を否応なしに理解させられてしまうほどに。

０５　金の生る木（後書き）

【白珠水晶（パールクォーツ）】

作者の捏造です。
実際には存在しません。
漢字としては、「しらたますいしょう」と読んでください。

見た目は普通の真珠まったく見分けがつきません。ある樹木の果実の部分にあたりますね。

真珠の知識はＷｉｋｉｐｅｄｉａから仕入れてきましたが、一応、そこまで医学は発達していない設定なので用語は避けて、あえて大雑把に書きました。

06　怪しいふたり組＋ひとり≠三人組

大抵、貴族は王都にも一つ屋敷を構えているものだ。大小の差はあったとしても。

「ここがアルステア家の王都別邸になります」

恭しくドルガは目の前に広がる建物の説明を始めた。

白を基調とした建物という点で述べればありきたりだとしか言えない。だが、所々に施された細かい装飾が壮麗な雰囲気を醸し出して、白の使い方が巧いと思う。この別邸は領地にある本邸に比べればだいぶ狭いものだとドルガは言っていたが充分に大きい、むしろ無駄に広い。

「アルステアだけあってなかなか広い屋敷だな」

「そうですね」

私もアレクの漏らした感想に素直に同意した。汚れやすい白い外壁なのにこんなにも綺麗な色を保っているとは。どれほどの維持費がかかっているのだろう。いや、考えるのは止そう。アルステアの屋敷にそんな無粋な話をしてはいけない。

私たちが今立っている場所は庭園内の屋敷正面の開けた場所だ。庭師によって計算された美しさを持つ樹木や花が庭を覆い、噴水が適度に配置され、その周囲からは放射状に舗装された道が屋敷まで続いている。さぞや素晴らしいガーデンパーティーが開けることだろう。

実はドルガが金緑館に訪れてからまだ半日も経ってはいない。ドルガは馬車で五日を費やして来たことからわかるように、けして王都と金緑館との距離が近いわけでもない。

ただ、金緑館から直接転移魔術を使って来ただけである。カルナ嬢の明確な体調悪化の原因が分からない今、あまり移動に時間はかけられなかった。

しかし意外だったのは、ドルガが転移できないと申告してきたことだろうか。

ドルガ自身がこの長距離転移に必要な量の魔力を扱えず無理だと言う。どれぐらいまで転移出来るのかと訊いてみれば、視界の届く範囲までだという。なんと曖昧な。それでは視力の差が出るだろうに。ひょっとしたら使っている術式自体が全くの別物なのかもしれない。今度、術式構成を見せてもらおう。新たな楽しみが出来た。

楽しくドルガと会話をしているところに突然腕を掴まれて、青い光が視界を奪った。数瞬後にはこの場所に立っていた。どうやらアレクが手早く三人分の転移術式を組み立てていたらしい。

（移動前に一声かけてくれれば良かったのですけれど）

ドルガはよほど驚いたのか、隣で尻餅をついたまま固まっている。初めての長距離転移なら当然の反応といったところか。

さて、庭へ転移したのはドルガが一緒だからか。

赤の他人がいきなり私室に現れるのは失礼にあたる。場合によっては侵入者として投獄されることもあるとか。しかし、今回は事前にドルガが連絡を取っている筈なので屋敷内に出ても良かったのか。

――この美しい庭が見れたから良しとしよう。

敷地内に突然現れたアトリルたちに対し、物珍しさからわらわらと周囲に人が集まってきた。転移の瞬間を目撃されたのか。コソコソと行くような理由もない、そう思って堂々と来たのが裏目に出てしまった。しかし非常に迷惑だ。揃いの服装から屋敷に勤める使用人であるとわかる。一定の距離を保ちながらも、彼らは私たちを取り囲んだ。そして、ひそひそとおしゃべりを始める。

『急に光から現れたのを見たわ』
『怪しいわね』
『泥棒じゃない？』
『こんな白昼堂々と乗り込んでくるなんて。あら、魔術師のドルガさんも一緒よ』
『まさか、彼も賊の一味だったの？』
『まあ、人って見かけによらないのね。あんな大人しそうな顔をしてて』
『人質にされているのかもしれないわ』
『警備の者を呼んだ方がいいわよね？』
『そんなの、もう誰かが呼びにいったわよ』

（……あなたたちの会話、全部聞こえてますからね）

酷く不愉快な気分になった。人を人攫いや賊と間違えるだなんて失礼な。

こうしている間にも彼女達の話の方向はどんどん悪くなっていき、我々は暗殺者集団であるということになって落ち着いたようだ。随分と想像力が逞しいことで。

「しかし、思ったよりも悪い意味で目立ってしまったようですね。……アレクが急に転移なんてするからいけないんです」

むっとして、アレクに八つ当たりしてしまう。思っていたよりも言葉の端から不機嫌さが滲み出てしまっていた。

「私達は暗殺者集団でドルガはその仲間だそうですよ」

私と同じようにアレクも聞いていたはずだけれど、あえて言葉に出した。ドルガに聴かせるためだ。

「しかし、ここの主は随分と統率のとれた使用人を雇い入れているようですね」

かなり皮肉を込めて言ったのだが、全く効いた様子もない。単純に阿呆なのか？

「そんな怪しい仮面をしていたら誰だってそう思いますよ。――ついに、あなたまでもが私を呼び捨てにするようになりましたね」

ドルガは頬を掻いて苦笑を浮かべる。

「そうでしたっけ？　ちなみに、これが我々の仕事衣装なのですけれど」

「黒髪だって珍しいのにその仮面ではね」

「いけないですか？」

「似合っていて美しいですよ！」

間髪を入れず、反射的にドルガは答えた。今、彼の視線の先にいるのはアレクである。

しかし、棘々しい言い方になってしまったが仕方がない。人を暗殺者集団と決めつけた者達の肩を持つドルガがいけないのだから。

今、アトリルとアレクは顔面を覆う仮面をつけている。白地に金で図案化された模様がひとつ描かれているものだ。アトリルが太陽でアレクが月の模様。

顔を隠すなら仮面しかない。そう考えた私は仕事時にアレクとお揃いでつけるようにした。この仮面だってイスラの傑作で、公式の場に着けて行っても恥ずかしくない立派なもの。私が白地の服に対し、アレクの黒地は黒地の服を着ているから、お互い対照的な雰囲気を纏っているようでとても気に入っている。

派手な仮面着用効果で、人々印象に残るのは白黒の仮面の二人組――ただそれだけのはずだ。

「ここまで目立つのならあの移動法でも良かったか。それなりの時間はかかるが空間転移より楽しいし、馬車なんてのは論外」

アレクはひとりため息をついた。

私もアレクも馬との相性が悪い。

乗馬をしようとすれば、馬は暴れ出した挙げ句逃げていく。もちろん馬だけでなく動物全体から嫌われているというのだろうか、近づいてもすぐに警戒されてしまう。動物は人間よりもずっと気配に敏感だから、何か感じとるものがあるのかもしれない。

馬には蹴られそうになったときには、二人揃ってその馬を殺しかけたことさえある。なんとか一命は取り留めたのだが、それ以来まったく懐いてはくれなかった。

そんな苦い思い出があるから、お互いに動物の乗り物に乗ろうとは言わない。もっとも、魔術の方が早くて楽というのもある。

「『あの移動法』っていうのは？　」

やはりドルガは尋ねてきた。

さて、なんと答えたらいいものやら。

「……そうですね、端的に言えば空を行きます」

できるだけ簡潔に事実だけを述べる。

「つまり、飛ぶって事ですか」

「まあ、飛ぶのは俺だけだけど」

アレクの意味深な言いまわしにドルガはますます怪訝な顔をしたが、深く掘り下げて訊いてはこなかった。

賢明な判断だ。

このように察せられる人を好ましく思う。

己が強い好奇心を満たそうとする輩は大抵長生きできない。触れてはならないものに知らず知らずのうちに触れてしまうからだ。

「こんな所で立ち話もなんでしょうから、そろそろ屋敷に入りませんか」

ドルガの勧める通り屋敷に入りたかったのだが、まず越えなければならない問題がひとつ。――この使用人たちだ。この取り巻きをどうにかしてしまわないと先には進めそうにない。

周りを見渡しても人だらけ。この短時間でさらに増えている。開けた庭という広い場所柄、屋敷に勤める使用人全員が集まっている

のではないだろうか。まだ狭い屋内に出た方が良かったのかもしれない。

もし私達が悪い輩だったらどうするのだろう。間違いなくここにいる人は皆、無事では済まない。

魔術師相手ならこれぐらいの距離は無に等しい。良い的になるだけだ。

「それにしても、邪魔だな。――おいドルガ、何とかしろ。今すぐだ。さもないと……」

「ええっ、そんなの無茶ですよ。取りあえず、ハイン様に連絡を取りますから待ってください」

「これ以上リルを人目に晒すつもりか？」

アレクの顔が更に険しくなる。

「そんなことを言われても……」

おろおろとしているドルガは置いておいて、もう一回転移したほうが早いかもしれない。屋敷内に出れば、この人垣からは解放される。これだけの人が集中しているのだから、屋敷内は手薄のはず。

――いけない、これは泥棒の考えることと似たり寄ったりだ。

さて、どうやって切り抜けるべきか。

本格的に悩んでいると、アレクとあまり年の変わらなそうな女性がひとり、こちらに向かって来るのが見えた。

彼女が通るところから人垣が割れていき、こちらを目指して歩いているのは明白だった。およそ使用人が着るにしては上等な服、使用人を引き連れていることからもこの屋敷において上の立場にいる

者に違いない。

★☆★

「皆の者、ただちに仕事に戻りなさい」

女の第一声はそれだった。

苛立たしげな様子を隠しもせず、周りの使用人たちに命令を下した。後ろに控えていた年配の侍女たちが急き立てると、蜘蛛の子を散らすように人垣が崩れていく。

（おっと、このまま無事に解散なんてさせませんよ！　あることないこと騒がれては面倒ですからね）

私はポケットから鈴を取り出し、手の内で素早く一回鳴らした。鈴の音は人が移動する音に紛れてあまり目立たなかった。硬質な音が確かに鳴ったのを確認して鈴をポケットへとしまう。

使用人達が持ち場に戻った様子を確認して、女は口を開いた。

「ごめんなさい。さぞや不快な思いをしたことでしょう。あとで厳しく言い付けておきますわ」

まず、女の口から出た言葉は謝罪だった。

「貴方が金緑の魔術師だそうですわね。噂はかねがね聞いておりま

すわ。私がアルステア伯爵家長女でカルナの姉にあたるミルシアです。この度は妹のことを引き受けてくださったと聞いております。当主に代わって先に御礼を申し上げますわ」

そう言って彼女は優雅にお辞儀をした。

カルナの姉ならば伯爵令嬢か。いや、たしか今は侯爵夫人だった気がする。言葉遣いといい雰囲気といい、貴族階級に属する者の振る舞いらしい。

「ミルシア様、こちらにいる方がかの金緑の魔術師、アトリル殿ですよ」

ややあって、ドルガは小声で彼女の間違いを訂正した。彼女の目線がアレクの方へと向いていたからだ。

「はじめまして。アトリルと申します。こちらにいるのがアレクですね」

「どうも」

アレクは短い挨拶のみ済ませた。本当に必要最低限の言葉だけ。もう少し愛想が良ければとは思うけれど。

「まあっ、こんなに小さな少年……あら、お嬢さんかしら？　カルナよりも若い方ですわよね」

「ご不満ですか？」

「いえ、そういう訳ではないの。……実力というものに年は関係ないのかもしれないって思っただけですわ。ところで、そちらのアレクさんはご家族の方かしら？　女性の一人旅は危ないですものね」

その言葉に私は曖昧に頷いておく。厳密に言えば兄ではないけれ

ど、似たようなものか。何なのかと聞かれれば咄嗟に答えられないだろう。そんな曖昧な関係が私たちの間にはある。

「こちらこそ。ずいぶんとお美しい方ですね。とても子供がいるようなお歳には見えません」

「まあ、ご存知でいらしたの？　ドルガかしらね？　今回、息子は向こう家の乳母に任せてきているの。まだ手のかかる子だけどすごくかわいいのよ。あなたにも子供が出来ればわかるわ」

そういって人懐っこい笑みを浮かべ息子話を続ける。一瞬、アレクのこめかみに青筋が浮いたような気がしたのは気のせいかもしれない。――しかし、いつになったら終わるのだろうか。

「ミルシア様、そろそろ中に……」

ドルガは申し訳なさそうに告げた。

「そうね。だいぶ冷えてきてしまったわ。早速で悪いけれど、妹に会っていただけません？」

すぐに真面目な顔つきになったミルシアは、快くアトリル達を屋敷へと招き入れたのだった。

07　見えるもの、見えないもの（前書き）

少し、不快に思う表現があるかもしれません。

07　見えるもの、見えないもの

一同は真っ先にカルナ・アルステアの部屋へと向かった。部屋に近付いて行くうちにミルシアの顔からは表情が消えていく。

「妹のカルナですわ」

ミルシアの案内でカルナの部屋へと入ると、そこから漂う異質な気配に顔をしかめた。そのまま部屋を横切り、奥の寝室へと足を踏み入れた瞬間――私は絶句した。口元を手で覆い、こみ上げる嘔吐感や嫌悪感をやり過ごす。

部屋の中心にある寝台で眠っている娘がカルナだろう。側には伯爵夫人と思しき人物と、数人の魔術師が治療の為に控えていた。

「カルナ様の体調がここまで悪化していたなんて知りませんでしたよ！」

部屋に入るなり、ドルガは中で控えていた他の魔術師たちに掴み掛かり取り乱した。

「四日前、私がここを出立した日にはここまで変色も進んでいなかったはずです。お嬢様の意識もまだあって、起き上がる事も出来ていて……」

「騒がしいわ、ドルガ」

ミルシアの叱責を受けて、ドルガはよろよろとその場に膝をつい

た。

「私のいなかったこの数日に、なにがあったんですか……」

顔を手で覆い、力なく吐き出された言葉は何よりもドルガの気持ちを表していた。

「ミルシア、そちらの怪しいふたり何です？　表が騒がしいとは思っていましたが。まさか、こんな仮面を付けた輩をこのアルステアに連れてくるとは」

機嫌を悪くした伯爵夫人は眉をひそめ、ふたりを直ちに外へ出すように命じた。

「お待ちください。お母様、彼らはお父様がお呼びになった例の魔術師ですわ」

「その怪しい者達が？　ドルガ、どうなのです。お前が連れてきたのでしょう」

「間違いありません。少なくとも彼らの実力では、学園の魔術師など相手にもならないでしょう」

その言葉を聞くや否や、周囲の魔術師達はみな殺気立った視線をドルガとアトリル、そしてアレクに向けた。

伯爵夫人がいる手前、勝手に意見を述べることは許されない。けれどもし許されていたとしたらその言葉を否定、或いは笑い飛ばしていたことだろう。

学園の魔術師とは――国内ほぼ全ての魔術師を指すものだから。

「そう。ではお前たち、早くカルナを診なさい」

伯爵夫人は尊大な態度でアトリルたちに命じた。

なぜこんな得体のしれない魔術師を信用するのか。あの馬鹿げたドルガの言葉を真に受けているのかとでも言いたげ様子で、疑念、猜疑、困惑といったあらゆるものが彼ら魔術師たちの間を渦巻いていく。

けれど、私もアレクも動かなかった。

「どうしたのです？　早くなさい！」

自分の意のままに動かない彼らに対し、伯爵夫人は苛立ちを感じ始めていた。

先に動いたのはアレクのほうだった。

「――ッ！　気持ち悪い」

彼にしては珍しく大きな声を出した。

動揺しているのだろうか、顔色も心なしか悪いように見える。仮面をしているからそんなもの見えないだろうって？　甘い。この仮面は私たち以外の他人の為にあるのだ。私には通用するわけがないだろう。

そしてアレクの発した言葉のおかげで私自身も正気に返ることが

できた。

「……ここまで酷いものは久しぶりです」

かろうじて絞り出した言葉は月並みのものでしかなかった。そして、この惨状を伝えるにはあまりにも言葉が足りない。

よくもまあ、こんな部屋で平然としていられるものだ……。

素直に部屋で控えている魔術師達に感心する。

まだ頭がぐらぐらする。

呼吸をするように当たり前に魔術式を見る私たちとって、この有り様はつらい。

アレクを頼りによろよろと、カルナのいる寝台へと近付いた。

「失礼します」

年頃の娘の為に設けらたのであろう、寝台を囲む薄絹をめくり、彼女の様子を窺う。

彼女の皮膚は事前に聞いていた通り、真っ黒に変色していた。痣のような青黒い色や赤黒い色ではなく、煤を塗りつけたかのような黒。顔も手先も関係なく視認できる範囲の皮膚はすべて黒かった。

よくぞ今まで世間に隠してこれたものだと思う。

髪の金と肌の黒の対比がより彼女の姿を痛ましいものに見せていた。その無惨な姿に同じ女として怒りがこみ上げてくる。

意識がないのか、そっと皮膚に触れても身動きひとつしない。彼

女の手を取りそっと額に近付けた。

――異臭がする。

彼女の肌から微かにだが変な臭いを感じた。そっとその臭いの正体を確かめる。

確かに彼女から臭うものだった。これは……腐臭？　動物の肉が腐るときの臭いとよく似ている。だとしたら、この肌の変色は皮膚の腐敗に因るもの？　だとしてもこのように肌の表面がさらさらと乾燥していて、爛れている様子もないのは不自然だ。変色しただけの皮膚はむしろ日焼けの状態に近い。

――何故、彼女の肌は腐るのか。彼女の身に何が起こっているのか。

現時点でこれといった情報は何もない。彼女の体だけが頼りだ。
そのまま目を瞑って意識を集中し、彼女の体の異変を探る。
まるで靄がかかっているかのようだった。
この寝台を覆う薄絹のように、ぼんやりとして実態が掴めない。
まるで何かに邪魔されているような。

――この部屋のせい？　それとも……。

体調が悪くなければこれくらい。そう思わずにはいられなかった。

「伯爵夫人、今まで……、今まで何人の魔術師を呼びました？　少なくとも両手の指の数では足りないですよね」

そういって私は天井を仰ぎ見た。

「ええ。同じ魔術師になら分かるのかしら？
学園からも呼び寄せた者の他に、ドルガが出立したあとで五人ほど招いたわ。結局、役に立ちませんでしたが」

溜め息をつきながら伯爵夫人は言う。

「その五人が原因か？」
「さすがにそれだけではないでしょうが……やってくれましたね」

「最悪だよ、まったく。これだとあと数日か？　のんびり来てたら、手の施しようも無かっただろうな」

死体と対面することになっただろう、とアレクは付け加えた。
その発言に目を剥いた者がちらほら。

「手遅れになる前に来て良かったですね」

室内の空気が一気に重くなる。アトリルとアレクは互いに頷く。

「すぐには死なないって言いましたよね」

打ちひしがれていたドルガは、顔を上げて言った。まだ、信じたくないという気持ちが強いのだろう。先の発言が否定されることを望んでいる様子だ。
だが、残念ながらそれはありえない。

「状況が変わっただけだ。遅かれ早かれ分かっていたことだろう？」
アレクは表情も変えずに言い切った。

「ドルガ、答えてください。大事なことです。
部屋の魔術式のうち、最初に現れたもの、次に増えたものと貴方が出立してから新たに増えているものはどれですか？」

じっとドルガの返答を待つ。

「魔術式ですか」
「ええ。この部屋広がっているやつの中で」

「……魔術式なんてどこにあるんです？」
いきなり何を言っているんだ、と言う目でドルガは私のことを見返してきた。

「見えていないんですか？」
再度問うた。試しに他の魔術師に聞いたが、同様の答えしか返っ

てこない。

ひょっとしたら……。

思い当たる節があって、寝台から軽く離れると注意深くあたりを見回していった。

どこかにあるはずだ、どこにある？

床、調度品、壁、窓、天井。じっと見落しがないよう入念に見つめる。視界が一周しようとしたところで目的のものを見つけた。

「アレク」

人差し指で天井のある一点を示した。

特に変わった飾りや模様もない場所だ。

しかし、アレクはしっかりと気付いてくれた。

「【散れ】」

アレクから放たれた力ある言葉は、この部屋を覆う偽りを砕き真実を暴いた。

みるみるうちに部屋の壁や、床、天井、それぞれが本来の姿を現し始めたのだった。

★☆★

そこには異常な光景が広がっていた。

魔術式、魔術式、魔術式、魔術式……。

魔術式はカルナのいる寝台を中心としてあたり一面に隙間無く描かれていた。いや、これは焼き付いてしまったといったほうが正しい。周囲に定着したそれらは複雑に絡み交わり歪んで解けて、色も形も醜く変わり果ててしまっていた。

それらは年頃の娘の可愛らしいかったはずの部屋を、より醜悪で酷いものに変えてしまっている。

部屋に入った当初、ふたりして馬鹿みたいに呆けていたのはこれらが全て見えていたからだ。

そしてある程度見ただけでその術式の構成が解ってしまう私たちは、この部屋を覆う魔術式の異常性に気付いてしまう。

愕然として辺りを見回すドルガ。他の魔術師も同様で、あまり魔術の知識がない者達でも似たような有り様だった。

「ここの魔術師もこの程度か」

「やはり、気付いてなかったんですね」

溜め息をひとつ吐き出してから、ずるずるとアレクに寄りかかる。時間が経つごとに酷くなっていくめまいに、立っていられなくなる。

「リル、しっかりしろ」

声の調子からもアレクの心配する様子が伝わってくる。崩れ落ちそうになる体をアレクが支えてくれた。

「ごめん。ちょっと駄目みたい」

突如、すぐ近くから甲高い悲鳴混じりの声が発せられた。

――頭に響くから止めて欲しい。

「な……なんなんですか、このおぞましいものは」

現れた術式を目にした伯爵夫人はようやく思い出したかのように悲鳴を上げ、そのまま床にへたり込んでしまった。両手で目を覆い、肩を震わせて取り乱している。

ミルシアは意識を失いその場に倒れた。傍で控えていた侍女がすぐさまミルシアを支えて退出していく。彼女達には刺激が強すぎたらしい。使用人たちのほうがよほど逞しかった。

すぐさま他の魔術師や侍女が協力して伯爵夫人も部屋の外へと連

れ出そうとするが、それをアレクの手が阻んだ。

「なんですか貴方は。奥方様には一刻も早く、他の部屋で休む必要があるのです。わかりますね。このまま部屋に留まっていればお身体に障ります」

魔術師のひとりが切羽詰まったような声を出し、アレクに退くように言った。それを聞いてもなお、さして気にした様子もない。

「ええい、退けと言っている意味が解らんのか」

「すぐに済む。伯爵夫人、ひとつ尋ねるがこの魔術式を気持ち悪いと思うか？」

伯爵夫人は怪訝な顔をしてアレクを見返す。

「……当たり前でしょう。これをそうと思わない人がどこにいますか」

「そうだろうな」

「なら早く退きなさい」

「だが、目に焼き付けておくといい。これはな、無能な魔術師やそんなやつを何人も連れて来るしかできなかったあなた方の――いや、あんたらの愚かさが招いた結果だからな」

アレクは強い眼差しで伯爵夫人を射抜いた。

怒気を孕んだそれはドルガに向けられたものよりもずっと冷ややかで鋭い。

周囲にいた者達は皆凍りついてしまったかのように誰も動かない、動けない。アレクから放たれる雰囲気が彼らを圧倒していた。彼から漏れる魔力も原因のひとつかもしれない。

まるでそこだけ人形にすり替わってしまったかのように見えた。

08　赤褐色のかくれんぼ

ついに立っていられなくなったらしい伯爵夫人が膝をついたのを合図に、皆がまた動き始める。

悲鳴を聞きつけたのか、新たな使用人が続々と部屋に押し寄せてきた。

淑女の部屋であるため、来るのは女の使用人ばかりだ。彼女達は部屋の中の異様な光景を気にしながらも、悲鳴のもとである伯爵夫人を第一に働いていたと思う。途中、体調を崩す使用人も現れたりして完了するまでに随分と時間が経っていた。

使用人達の出入りが途絶えると、部屋は再び静かになっていた。

「さて、どうしますかね　」

「術式の排除、身体から魔力を摘出。それから身体の治療ということでいいか？」

アレクはすらすらとやるべきことを並べ立てていく。

アトリルはまだ彼女の具体的な症状については何も言っていない。それだというのに、こうしてアトリルの求める答えを的確に出してくるのは、長い時を一緒に行動しているからだろうか。理解が早い。

「いったい、どういうことなのですか」

億劫そうに、しかしゆっくりとした動きでアトリルは声の方へと首を向けた。

ドルガが困惑を浮かべて立っている。それ続いてちらほらと控えめにだが同意の声が上がる。
彼はこの部屋の中で一番私達に話しかけやすい立場にいた。愚か者扱いされたばかりの他の魔術師では言い出せなかっただろう。

近くの適当な椅子をアレクに持って来させると、アトリルはそこにゆっくりと座った。
ふかふかな椅子の座り心地に満足していると、心配そうな顔をして覗き込んでいるアレクと目が合う。無理をしてまで依頼を受ける必要はないと甘やかしてくれる彼に、まだ大丈夫だから、と軽く意地になって反発してしまう。
身体から冷や汗が噴き出していた。揺れる視界も体調の悪さをいっそう強く主張するけれど、何度かまばたきを繰り返して視界を無理に安定させる。

「それはですね、彼女の皮膚はこの部屋に集められてきた魔力によって傷付いているんです。皮膚から魔力を体内に取り込んでしまった影響でしょうね」

ゆっくりと吐き出すようにアトリルは言葉を紡ぐ。
本当はいちいち説明をするのも煩わしく、本音を言えばすぐにでも作業に入りたいと思っている。だが、アトリルはまだ依頼主であるアルステア伯爵に会っていないのだ。ドルガと交わしたのはあくまでも仮契約。ドルガを代理として立ててきた以上、彼の依頼を受けた時点で正式な契約と見なせるのだが、アトリルは支払い義務を負う依頼主の同意がどうしても欲しかった。仕事である以上、これは守るべき一線だと彼女は思っている。

「ちょっと待ってください、お嬢様は魔術師ではありませんよ。それなのにどうして魔力を体内に取り込むことができるのですか。だ

としても傍で仕えている使用人には異常が現れていませんよ」

ドルガは話の腰を折って質問をぶつける。

「それはこの魔術式の対象が彼女であったからですよ。無差別ではありません。術式については詳しく説明している暇はありません。ただ、今問題なのはこの部屋の魔力が彼女の身体に良くないということで……」

「あら、そんなのは当然のことでしょ。彼女は魔術師じゃないんだから」

高い声からも彼女は十代半ばの年頃と思われる。綺麗と言うよりはかわいい顔立ち。波打つ髪は膝裏近くにまで達するのではないかというほどに長い。それは一般的な濃いめの茶髪だったが、毛先まで変色もせず艶やかに伸びる様は美しかった。

「あなたは？」

「あたしはアナミラ、……アナミラ・トリノエリソよ！　学園の魔術師ね。まだ在学中の身だけど、それなりに仕事の実績もあるんだから」

――こう見えても優秀なんだからね、と笑いながら付け加えはきはきと喋るその姿は、この部屋に漂う陰鬱な雰囲気を吹き飛ばすような明るさを秘めていた。

「私はアトリルといいます。姓は特にありませんね。あなたはどうしてこちらに？」

「アルステアにはお世話になってるの。出来ることがあれば力になりたいと思うぐらいにはね。そこのドルガと似たようなものよ」

アナミラの言葉にドルガは苦笑いを浮かべながらも頷く。
「ところで、あなたも体調が悪くなったの？　突然椅子に座りだしてさ」
彼女は当てずっぽうで言ったのかもしれないがそれは正しい。
「……まあ、それなりにね。支障ありませんから」
否定することは容易いが、こう言った方が相手は納得するものだ。
「ふーん。魔術師なのにね」
ちなみに、魔術師と非魔術師の差は魔力を扱えるか否かにある。
身体に魔力が馴染みやすく魔力への耐性がある魔術師は、体内に魔力を長時間留めておくことも可能だ。それに比べ、魔術師ではない一般人は魔力への耐性がほとんどない。魔力を取り込んでしまうといった場合は滅多に起こらないはずなのだが、仮にそうなった場合は魔術師が必要になる。
放置すれば心身に悪影響が現れ始め、意識の混濁など様々な機能障害へと陥ってしまうとか。故に早期の治療が望ましい。
「ここの魔力はタチが悪いですよ。まるで猛毒。見えないから対処は難しく、術式自体をどうにかしなければ意味がないのですからね」
「……私達もずっとこの部屋で魔術を使ってきたけど」
語尾を小さくしながら、不安そうに彼女は呟いた。
「無意識のうちに部屋の魔力を拒絶しているのでしょう。大丈夫だ

と思いますよ。人間の身体は生きることに貪欲ですから」

彼女が不安に思っていたのは、外部から魔力を取り込む魔術師がその魔力の影響を受けていないのか、それとも今後受ける可能性があるのか、といったところか。

魔術を行使するためには、周囲に漂う魔力を一度体内に取り込まなければならない。それを術式という形に放出して魔術にする。魔術師だからこその考えだろう。

「たしかに魔力を集めるときに違和感はあったわよ。けど、今までずっと同一地点での術の使い過ぎによる魔力不足が原因だと思っていたわ」

ねえ、と同意を求める彼女に周囲の人間たちも頷いた。

周囲から魔力を集めてゆくのだから、術を使えば自然と魔力の少ないところもでてきてしまう。拡散によって再び魔力がそこに集まってくるにしても、それなりの時間は必要になる。

魔力を扱う魔術師がその差異に注意を払っていなかったとは。魔術師の意義は魔術を使えるか否か。いざというときに魔術が使えない魔術師に何の意味があるというのだろう。

アトリルは嘲りを含んだ笑みを浮かべる。それが誰に向けられたものなのか。考えるまでもなく彼女にははっきりとわかっていた。

「もう、笑わないでってば。――ところでさ、言いづらいんだけどさっきから変な臭いがするのよね」

彼女はアトリルの笑みを自分に向けられたものだと勘違いしたらしい。恥ずかしそうに振る舞った後とは打って変わって彼女は顔をしかめて言った。

確かに生臭い何か、生き物独特の臭いが感じられる。その言葉を聞いたアレクの目が僅かに輝き始める。

「掃除に問題があるんだろうな」

先ほどの野次馬に対する意趣返しか、アレクは短く非難の言葉を口にする。

わざと周りに聞こえるように言っているところが彼らしい。

だが、当の使用人達はそれに対して怒るよりも先に、慌てて異臭の原因を探し始める。彼らのことを少しだけ見直した。

屋敷の手入れは使用人たちの仕事。そして使用人の不手際はそのまま雇用主への評価に繋がっていく。使用人の替えはいくらでも利くのだから、仕事も満足にできない者を雇い続ける必要はないだろう。

従って、使用人達が必死になって原因を探しているのはもっともなことだった。

時間が経つにつれて彼らの表情は曇っていく。室内では未だに原因が見つけられないことに対する苛立ちが表れ始めていた。

眉根を顰め、布を鼻に当てている者、足で床を蹴るもの……。

その中でアトリルはひとりの使用人の視線がおかしいことに気付く。その視線を辿ればすぐそば、この寝台に行き着いた。だが、彼女が凝視しているのはカルナではない。さらにその下――寝台の下だ。

「アレク、寝台の下を調べてください」

青い顔で言いにくそうにしている使用人に代わり、アトリルが指摘をする。
当然、何を言い出すんだという空気も流れる。
それを無視してアレクが素直に布を捲れば寝台下の狭い空間見えた。彼がそっと中を覗き込もうと体勢を低くしたところ、何かが隙間から飛び出してきた。しかも彼の顔に向かって一直線に。それをアレクが反射的に掴み取った。

周囲からどよめきがあがった。
だが、次に彼が掴んでいる物に目を遣れば高揚した気持ちも下がること下がること。
アレクも己が手にしているものを認めた瞬間、それを床に叩きつけていた。汚いものを触ってしまったと、ひどく苦々しく思っている様子が伝わってくる。

――それは生き物だった。
赤褐色で太い芋虫のような何か。体はぼってりと肥え太り、うねうねと動く姿が気持ち悪い。けれどそいつの動きは姿から想像も出来ないほどに素速かった。
再びアレクに襲いかかろうとする様子を見て、アトリルは慌てて魔術を発動させた。瞬時に赤い光が現れて対象を貫き、床に縫い止める。
恐ろしいのは体を串刺しにされてもまだ、アレクに襲いかかることを諦めていなかったことだ。
どろりとした粘りのある体液を出しながらも、牙のようなものを剥き出しにして敵意を見せる姿に薄ら寒さを覚える。
危なかったとひと安心しているところに別のもう一匹が現れた。
不測の事態に対応が遅れてしまう。間に合わないかもしれない。

そう思いながらもアトリルは魔術を組み直す。しかし、その動作が完成するよりも早く、アレクの魔術が先に発動した。

目の前にはひとつの氷塊。

ごつごつとした透明度の高い氷の中心には、躍動感溢れる姿で静止している例の芋虫のようなものが一匹。今にもこちらに向かって跳んできそうな姿で氷漬けになっている。もう少し気泡の多い氷ならば中身が透けなくてよかったのかもしれない。しみじみとアトリルはそう思った。

「もう……いませんよね？」

アトリルは両手で頭を抱えながら、周りをきょろきょろ見まわして言う。

「大丈夫だ。さっき捲ったときには二匹しか見えなかった」

「気持ち悪いですよ、それ。

――お前はどこから来たの？」

見たくもないけれど、逃げてばかりもいられないと腹をくくってそれと対峙する。

その芋虫もどきのうちの一匹に向かって高圧的に詰問する。先に魔術で串刺しにしたほうにだ。大事なのは弱気なところを見せて相手に侮らせてしまわないこと。

真剣な顔つきで芋虫もどきに向かって話かける姿に、アレクを除く皆が例外なく目を点にした。

「所属はどこだと聞いているんですよ。お前の主はどこにいる？」

まだ大真面目に言っているので、今度はまわりから笑い声が生ま

れる。

それに構わず無言でもう一本、二本、三本……と串の数を増やしても、芋虫もどきはビチビチと動いているだけで何も語らない。

「ふふっ、そんなのがしゃべるわけないでしょ。聞かれたって答えようがないじゃない。さっさと殺しちゃいなよ」

言うや否な、アナミラが術式を組み立ててそれを丸焼きにした。赤い炎に包まれてうねうねと動くが、どんどん水分が蒸発していく。床も一緒に焦がさないのは彼女の腕前に依るところか。

黒い煙を吐き、炭になって呆気なくそれは死ぬ。もう一体も同じように始末しようとする彼女を止めに入った。

「なんで止めるのよ。

そんな汚いの、さっさと殺したほうがいいじゃない。気持ち悪いし」

「……これは有益な情報源ですよ。それを炭にするなんて」

その浅はかな考えにただ笑うしかなかった。

せっかく二匹もいたのに、なんということだろう。二匹いれば片方でありとあらゆる実験を施し、その結果を鑑みてもう片方から確実に情報を引き出せるはずだった。サンプル無しの未知の個体から情報を抜き出すのはずっと難しい。当然、危険も伴ってくる。こうなってしまえばその道の筋に任せるのが一番だろう。

イスラかサラエ、どちらのところに頼むべきか。

イスラの実力をもってすれば、相手はぺらぺらと恐怖で喋り出すかもしれない。だが、城に送ってもすぐにイスラが気付いてくれるかわからないし、あの過酷な環境で芋虫が生きていられるのだろう

か。だが、こんなものをサラエのところに送れば、後々何を要求されることになるか……。

しばしの逡巡の後、アトリルはサラエの方へ送ることに決めた。能力的にもサラエの方が適任だろう。さらさらと短い手紙を書き添えて、サラエの城へと送り出す。アレクに長距離転移魔術の扉を開いてもらうと、氷塊と手紙をそこに放り込んだ。あとは結果を待つだけである。

緊急と書いておいたから、おそらく数日後には判るはず。彼女達に任せれば安心だ。

いったい、どこの誰の差し金か。

見つけたらきつく仕置きしてやろうと、アトリルは深く心に刻み込んだのだった。

09　安全第一で

例の術式の処理について話し合うことになった。

「さて、さすがにここまで術式が溶けているとなると、ひとつひとつ解くのはね……」

骨の折れる作業だと、ぐちゃぐちゃに絡まった術式を前にアトリルの気持ちは沈んでいた。

「まとめて全部消すから問題ない」

「ではアレク、お願いしますね。私は彼女の治療に専念の治療に専念します」

「ああ」

アトリルは再びカルナの横たわる寝台へと向かう。その背中に鋭い一声がかかった。

「そんな荒唐無稽な話を我々に信じろと？」

「冗談ですよね」

「術式破壊って……暴走するぞ。こんな王都のど真ん中で馬鹿じゃないのか？」

魔術師達は次々に不満を口にし始めた。

治療を出来ることが前提で進められていく会話が受け入れられないだけかもしれない。

「そうですよ、術式を破壊するなんて。ここは王都でも貴族が大勢

暮らす区域ですよ。そんな力任せな方法は……他にもっと良い方法はないのですか？」

直後、溜め息が響く。

「何を言ってるんですか、あなたは。この期に及んでよくもまあそのような言葉が出ますね」

呆れを通り越して笑うしかないと言わんばかり。

「人を危険に晒すような行為はどうかと」

「リスクを負わないで何ができます？　あなたの頭、砂糖で出来てるんじゃないですか。要は失敗しなければいいだけの話ですよ」

「そんなことが出来たら苦労はしないんですけど」

「苦労はしていますよ」

的外れな答えにドルガの顔は引きつる。

「何を迷うことがありますか。カルナ様を助けて欲しいと言ったのはあなたでしょう」

アトリルは優しく、諭すように言った。ドルガはぐっと言葉に詰まる。あれからあまり時間も経っていないのだから、はっきりと思い出せよう。

「大層な自信だな、若者」

唐突に、部屋にいた魔術師の一人が口を開いた。

髪に白いものが混じる初老に差しかかった渋い顔つきの男。歳の

せいか、魔術師の中でも特に落ち着いている。

「そもそも術式を破壊して無事でいられると思っているのか？」

厳しい表情を浮かべたまま、その男は話を続ける。

「おぬしだけではない、彼女や周りへも害は及ぶだろうよ」

「それはそこらの未熟な魔術師のすることでしょう？　関係ありませんね」

――馬鹿にするな、そう言っている。

「ほう……」

初めてその男は興味深そうにアトリルを見る。若さ故の無謀か、その根拠はどこからきているのか、はかりかねている様子。

「自信ではありませんよ。――事実を述べているに過ぎないのですから」

そもそも自信の有無など魔術には関係ない。寝ていようが、何をしていようが、魔術式の構築を間違えないかぎり失敗などありえないのだ。大事なのは魔術式を作り出す精確さであり、結果だった。

「ならば問おう。仮に術式をどうにか出来たとしてお前はその後、如何ような魔術を使う気でいるのだ？　こんな状態の彼女に対して。ましてやアルステアは古き貴族の系譜。尊き命をそこらの民の命と同じに扱うことは許されない。確証のない方法を用いるわけにもいかんよ」

こうした考えが常に魔術師の中にあったのだろうか。
確実で安全な方法を選んだ結果が目の前に突きつけられているに過ぎないのか。

「ルミダの理論を軸にした賦活と皮膚の修復ですよ」

――魔力にはあらゆるものに干渉する。
それまで漠然としか理解されていなかった魔力の性質を一定の枠に収め、定義付けたもの。その理論をもとにあらゆる説がたてられ、魔術を飛躍的に発展させるきっかけとなった。人体の自然治癒力を高めるというという発想も、それをもとにしている。

「それなら既に我々がやっている。まさか、我々を馬鹿にしているのか？」
「馬鹿にしているわけではありませんよ。ただ、他に適当なものがありませんからねえ。まあ、アレンジがいろいろ入ってます」

「手を加えただと？　信じられるものか。既存の魔術を弄って成功した例など。そもそも、こんな小さなガキどもに我々以上の何が出来るというのだ？　ここには二級魔術師のグリーグ殿がいるのに」

今まで全く発言していなかった魔術師の問いかけは場に新たな波紋を広げる。

「アトリル、だったか。お前のことは聞いたこともない。人生の大半を学園に費やしているにもかかわらず、だ。学園に所属していたのかさえ疑わしくなる。そんな奴らの話を本気で信じるつもりですか？」

異を唱えるものはいなかった。

ここにいる皆が少なからず同じように思っているのだ。このふたりを信じて良いものかと。
この男によれば、あの落ち着いた初老の男の名はグリーグという。二級魔術師ならかなりの手練れとみていいだろう。

国は、一級から十級までの十等級で魔術師の技量を表した。
取得には学園で試験を受けるか、それに準ずる結果を出して認められる必要がある。
いずれかの手の甲に星のような形を刻まれ、それは級が上がるごとに星の角が増えていく。つまり、星が鋭くギザギザしているほど高位の魔術師というふうになるのだ。
また、一級だけは学園が発行するのではなく王家が下賜するという形式をとるが、それは四方位も同じ。多大な功績や特殊な事情でもない限りは与えられない。頻繁に与えられるものでもなく、二級魔術師を一流と呼ぶのは仕方ないことだった。
無論、アルステアの財力や人脈を持ってすれば、一級魔術師を呼ぶこともできたはず。けれども彼らはあまりにも目立つ存在。あまり公にしたくない事柄であれは、二級魔術師を呼ぶしかない。金緑の魔術師に白羽の矢がたったのもそういった事情からだろう。

そんなことを考えていて黙っていたアトリルに何を勘違いしたか、男は己の主張の正しさを確信し、さらに強気な態度にでる。

「なんならその不気味な仮面でも取ってみたらどうだ。顔さえ明かせないのは後ろぐらい何かがある決定的な証拠ではないのか？」

――不気味な仮面？
その言葉がアトリルを思考の渦から呼び覚ます。

「さっさと身の程を弁えて帰るのが賢明な判断というものだよ、田

舎“魔術師”。いや魔術師かどうかも疑わしいのだった」

男の放った言葉は確かにアトリルの心に響いた。

あえて『魔術師』のくだりを強調する随分と馬鹿にした言い方。イスラが丁寧に作った仮面に対する不当な評価。身内がそのように侮辱されることをアトリルは許せない。湧き上がる感情に身を委ねようとしたが、「口を閉じろ、不愉快だ」と言うアレクに冷静さを取り戻す。

「わた――」

「二度も言わせるな！」

アレクが男の声を遮った。私、と言いかけたであろう言葉は途中でかき消される。怒気を孕んだ言葉は相手を怯ませるに十分な迫力を持っていた。

「こ、の……」

男はふらふらとアレクの方へと近づいていく。自尊心を刺激された故の行動だろう。距離を詰めてアレクの胸ぐらを掴みにかかろうとし、腕を挙げたままの中途半端な姿勢で静止した。男は目を見開きそのまま動かない。口が薄く開かれたままだ。

「どうしてお前たちの信頼を得る必要がある？　」

仮面の僅かに開かれた目元から覗く瞳を見た男は気付いてしまった。目の前にいる存在が如何に恐ろしいものであるかと。アレクただは冷ややかにその男を見下ろしていただけなのだが。

男のこめかみから汗が一筋、顎を伝って床に落ちる。

「向こうが要求しているのは娘の治療だ。俺たちはアルステア伯爵の意向でこの場にいるのであって、お前たちに雇われている訳じゃない。余計な口出しは迷惑だ」

攻撃を仕掛けるのも時間の問題か。語尾から苛立ちが垣間見える。敵と見なしたという事実だけでアレクには充分だった。普段なら頃合いを見計らって仲裁にでも入るところなのだが、アトリルは動かない。ただ腕を組んで見守っていた。

この男、でかい顔に額は広く、細い目との釣り合いが良くない。脂肪を蓄えている厚い腹は言うまでもなく。まじまじと見るのも嫌になって早々に視線をアレクへと戻した。

先に動いたのはアレク。

片手で男の手を払いのけると正面から相手の腹を蹴り飛ばす。不意を突かれた男は避けることもできず、直撃を食らって尻餅をついた。動きに合わせて腹が揺れる。厚い脂肪があるようだから、大した怪我にはならないだろう。腹を抱えてうずくまる男は、燃えるようなぎらぎらとした眼でアレクを見上げる。そんな視線を受けても彼の表情に変化はない。アレクの顔からはとうに表情が失せていたからだ。

「だいたいガキだの、田舎者だの。挙げ句の果てに仮面を取れ……何だ、お前は？」

けして怒鳴っているわけでは無かったがその声はよく通った。依然として部屋では物音ひとつしない。

もしここで男が何かひとことでも反論していれば、事態はさらに悪化していただろう。そう思わせる何かがそこに存在していた。この部屋の出鱈目な魔術式が彼の気持ちを苛立たせ、煽っているのか

もしれない。アトリルは努めて冷静に分析する。

どうやら男への処遇が決まったようだ。一回蹴っただけでは満足できなかったらしく、彼の手の内では無数の魔術式が蠢いている。

「な……何をするつもりだ！」

指先の動きに合わせて、魔術式がみるみる複雑化していく。それを見た男から今まであった余裕というものが剥がれ落ちていった。顔面蒼白になってじりじりとその場を後退（あとずさ）る姿は情けないの一言に尽きる。

「まさか、私に魔術を使う気か……。こんなことをして、」

「こんなことをして？」

それがどうした、とでも言いたげな態度は堂々としていて男も二の句が継げない。

結局、彼の言葉がアレクの行動に対して影響を与えることはなかった。

「アレク、病人の前ですよ。弁（わきま）えなさい」

「だが……」

「アレク」

強い言い回しにアレクは押し黙る。

「それに、屋敷壊してまた弁償なんて私は嫌ですからね」

彼は一度、余所の屋敷を大破させた過去がある。そのときは向こうに非があったため問題にすらならなかったが、今回違う。いくら

別邸とはいえ王都の屋敷。さりげなく置かれた調度品一つでもきっと恐ろしく高価なものであるに違いない。アルステアにはいい迷惑になるだろう。

「それぐらいの分別はあるさ」

彼は拗ねたよう呟いた。魔術式は維持したままで。彼にやめるという選択肢はないらしい。

「そうですね。では、言い方を変えましょう。魔力の無駄遣いはしないでください。大事な魔力をそんな者に割くというのなら私が貰います」

「アトリル……まさか」

アレクはその言葉に驚き、上擦った声をあげる。

「いいえ、手持ちの分で対処できる範囲ですよ」

それでもまだ何か言いたそうな視線を向けてくる。

「彼の評価は一般論の範囲内です。言葉の選択に問題はありましたがね。我々が仮面を付けているのは事実ですから。さあ、それ以上の報いは必要ないでしょう」

しかし、まだ納得はしていないようだ。このまま引きずっては、後々何をしでかすかわからない。見えないところで闇討ちぐらいはするような奴だ。仕方なく椅子から身を乗り出して、彼の耳元で囁いた。

『我慢してください、あなたならできますよね』

できないとは言わせない、卑怯な言い方だった。

口元は不満げに引き結ばれてはいるが、ぐらぐらと揺れる瞳がもうひと押しだと告げている。

『代わりに、欲しいものをあげましょう』

ご褒美で釣る作戦。

扱いは子供に対するそれだが、これで大抵まるく収まる。それで駄目なら次の手を考えれるまで。じっとアレクを見つめる。

ややあって、彼は術式を握り潰した。アトリルの目論見はうまくいったらしい。

『約束だ』

彼は口元にやわらかな笑みを浮かべて言った。ただ同じように低い囁きで返された言葉。それに不安を覚えたのは何故だろう。けれど深く考えることはしなかった。

そのままの流れで椅子から立ち上がると、アトリルは未だに尻餅をついたままの男に向かって一歩を踏み出した。アレクに腕を引かれるけれど、それを無視して男の前に立ち、片膝をつく。男の意識がアトリルに向いた。

「私はね、出来もしないことを出来ると言うような恥知らずではありませんし、出来ないことをわざわざ引き受けるほど暇でもありません。彼女のことは私達が必ず治しますからご安心ください」

ただ、にっこりと笑いかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2656s/

永遠の魔術師

2011年11月19日10時01分発行